



BATTLE
FUCKERS Vol.1+2
-CAOMY- -CHUN-OI-

「ダポッージュポージュスルルルー！」

「くっ、いらいぞーなんて絶妙な舌技だー！」

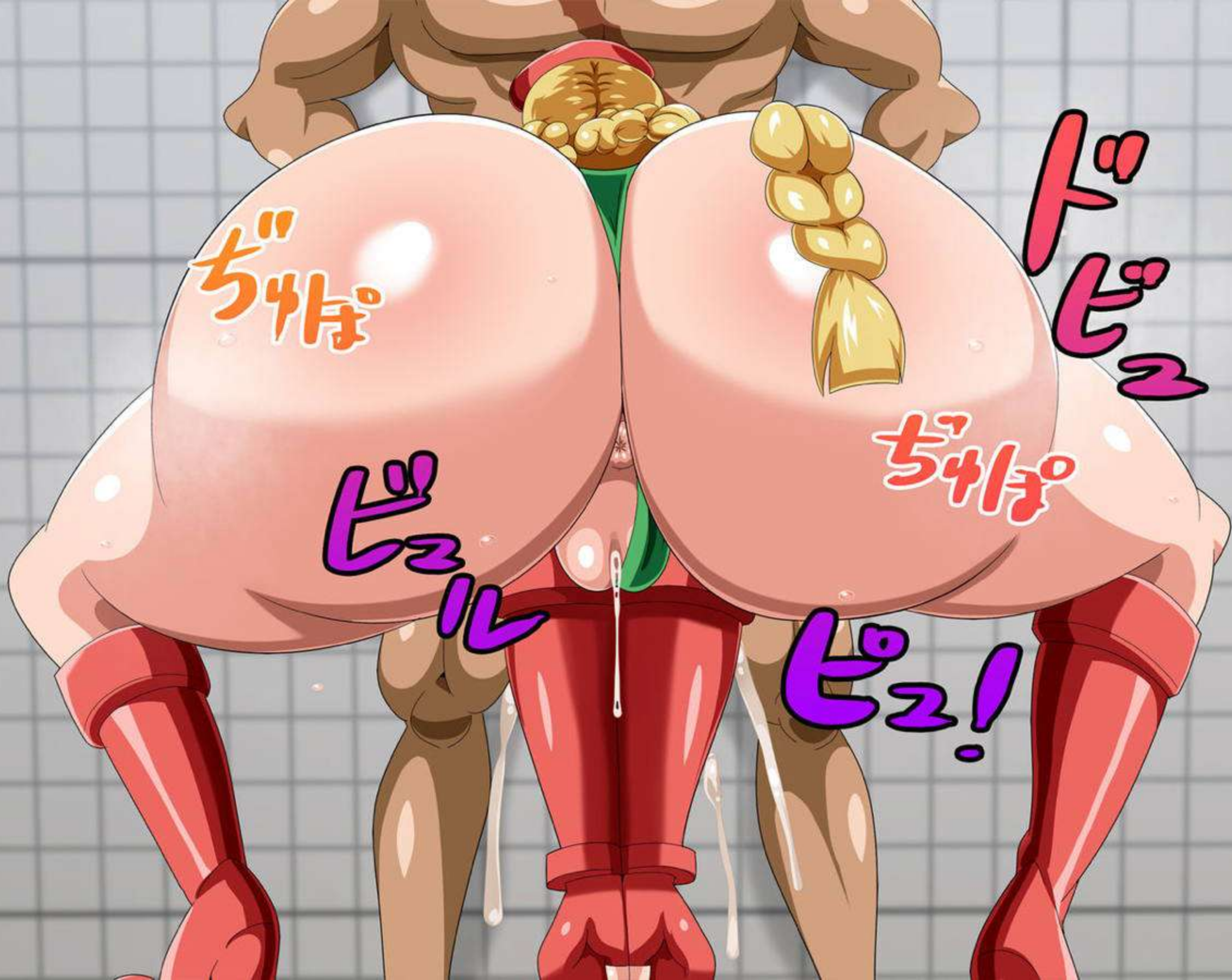
「それもデルタレットで学んだのか？」

「ジュポージュポーチュルルー！」

「…いや、シヤドルーで散々仕込まれた」

「なるほどな、どつりで俺のチンポに物怖じせずしゃべれるわけだ」





ちやぽ

ドビュ

ちやぽ

ビュ

ビュ!



「乳は小さい方だと思ったが、しっかり挟めるんだな」

「バカにするな！しかしこのチンポ、

パイズリだけでなくフェハラをできるほどデカイのか」

「しっかり、乳首も使って擦れよ」

「うるさい！お前は黙ってイケばいいんだ！」



トビ

トビ

トビ

13

13

「しかしお前の服は本当に……痴女丸出したな。」

闘いの最中、お前がハイキックを繰り出すたびに
そのはみ出るマン肉に何度目を奪われたことが「

「黙れ、私はこれが動きやすいんだ！」

しかし足でヌイてほしいとは……安心しろ。

私は足でのイカせ方も訓練で心得ている。

女に上に乗られながら、汚い足で情けなくイクがいい」



ゴッ

ゴッ

ゴッ

「脳で挟んで手で抜いて欲しいとは、とんだ変態だな」

「いつも脳から雌の発情臭を出してる変態女には言われたくないな」

「くそっー両手でコロコロしてるとらんのよ、余裕ではみ出して……なんてデカマラだ」

「なめるな、」の帝王のマラだ。もっと脳を締めつけてシコナー」





びゅ!

びゅ!

どど!

A muscular man with a red headband and a woman in a green leotard are embracing. The man's chest and arms are prominently displayed, showing his large muscles. The woman is wearing a green leotard with a large bow at the back. She has blonde hair in pigtails and is looking at the man with a slight smile. The background is a simple grid pattern.

「闘いの場にハイレグで来るような女には丁度いいプレイだろっ」

「ん、ん、貴様はどこまで私を馬鹿にすれば気がすむ？」

「鍛え上げられた腹筋が亀頭に当たっていい感じだ。

しかし、何やら卑猥な音がするが、この汁は何かかな？」

「んん……き、貴様の我慢汁だろ」



とびっ

とびっ!

「くそー!この小柄な身体の小さなアナルが

俺のデカマラを全部受け入れている…だとー!?!」

「覚悟しろー!お前の性を全部吸い取ってやる」

「ぐおおおー!なんとという尻圧だ!」

ぐっぽり開いて俺のモノを飲み込んだかと思うと、

容赦なく締め付けてくる……

油断しているとマラが干切られそった」

「ぐっ、まだまだ序の口だ!」

本気でケツ穴に力を入れて、お前のザーメンを吐き出させてやる!」





トッポ

ポッポ

トッポ

「ぐっぽーぐっぽーぐっぽーぐっぽーぐっぽー！」

「くっーやはりイマラも慣れているかー！」

「これもシヤドルーの調教の賜物がー！」

「じゅぽーじゅぽーじゅぽー……はあ、ほふはー(ああ、そっだ)！」

「チンポを入れるときに喉奥を開いて失神するくらい飲み込み、

出す時には口を思いきりすぼめてカリ裏から根本までしっかりと刺激するか

お前……なかなかやるなー！」

「じゅぽーじゅぽーじゅぽーじゅぽーじゅぽー！」





ビュッ

ビュッ

ビュッ

「小娘だと思っていたが、なかなかたわわに実っているんだな。」

まんこに指を入れただけで汁を出すとは、

しっかり調教されているようだな」

「くっ…やりたければ早くしろ！」

「まあ、そう焦るな。まずは指でイってもらおうか」

「くっーや、やめろーん、ん、ん！」





アム

アム

アム

アム



ドグ

ドク

ドク♡

「あっーあっーあっーあっーあっー……お、奥までズンズン来るー！」

「うおおーよく締まるー！お前は自分で上に乗るより、
後ろから突かれる方が感じる変態だなー！」

「あっーあっーあっーあっーあっー……ふさけるなーそんなはずは……！」

「シヤドルーで調教されてドエムの雌豚に成り下がったか！」

ほらーもっといいで泣け」

「あっーあっーあんっー……ああんっー……！」





「あっーあっーも、もうやめろ……少し休ませろ」

「そんなことを言って、俺のチンポを離さないのはお前のアナルだぞ?」
「あっーあっーあっーあっーあっー!」

「恨むんなら自分の堪え性のないアナルを恨むんだな」

「あっーあっーあっーあっーあっーまたイクーもうアナルでイキたくない!」





トビッ

トビッ トビッ

トゴッ

「貴様、遠慮なく人の膣内に何度も何度も射精して

……さぞ満足だっただろうな」

「フ……貴様こそ帝王のチンポはごうだったのだ？」

「くっ……ハアハア、中の下だな」

「その割にはずいぶんと下の口がひくつらつらなるな

チンポを抜くときも名残惜しそうに吸い付いていらした」

「ハアハア……黙れ、お前の見、見間違いだ」

「ほっ、っ、っ、ならは俺とのバトルフマツクは」むきむきにするがっ」

「……も、もう一度くらいは相手してやってもいいかな」



ピュッ♡

ピュッ

ゴポッ





















































「ハランヨーー！相変わらず見事なドスケベ乳だ！

今日は久しぶりに徹底的に犯してやるぞー！」

「お、お手柔らかーね」

「オレの手でも」ぼれ落ちるほどの巨乳、またデカクったのどばならんか？

「一体何人の男にも揉まれてきたんだ？」

「……ぞ、そんな」ど言えならんぞ」





「やはり」の尻「キを堪能せんわけにはいかん！」

「もう……あなたも本当に「これが好きね」

「」の豊富なデカ尻の包容力……たまらん」

「デカ尻なんて失礼ね。そんな人はお尻で締めあげちゃうわよ！」





トビッ

ビュッ!

ビュル



「足技の名手だけあるな、相変わらずいらい足「キ」だ」

「もう、足「キ」なんて何が気持ちいいのかしら」

「引き締まったお前の太ももの筋肉が、何よりのスリネタだぜ」

「もう、そんなにお股してる見ないで、ちっちと「キ」なせいでよ」

ヒョルル

ト
ヒョ

ヒョ!



「本当、男ってパイヌリ好きよね」

「まあな！特にお前の乳は脂がのってるからよくチンポが滑るんだ！」

「デリカシーのない人は、こうするわよー！」

「くおおーなんという乳圧だ！乳首もっまく使って、

根元からカリ首までしっかりと刺激してくるー！」

「もっ我慢なんてできないでしょーはやくザーメンっ田っちならなれー！」





ドブッ

ドビュッ

「ジューポー！スポポー！ジュースポポー！」

「おおーいいぞー！相変わらず、根元までしっかりと啜えて、最高のフェラチオだー！
「あなたも、ジュースポー！相変わらずじゅ…スチュヌチュ！」

「頭が外れそうなデカマラね」

「そんな」と言っつて、ロ元が緩んでるぞー！俺のマラがそんなに美味いか」
「うん、うるさいわねー！余計なこと言っつと本気でイカせるわよー！」





「へんちなわらー三角絞めよー!」

「くおおおおー首が締まる……ジュズル! ペチャピチャー!」

「イヤーやめなさいーそんな汚い!」ろー執拗に舐めな!」

「」の蒸れた股間の匂いたまらん!」

マン汁も熱れた女の浅まし! 雌の味だ!」

「そんな詳しく解説しな!」

「」のまま! 落ちて! ちやちや!」



フニャ
アアアアア

ビュ

ビュ

「俺の極太チンポを簡単に受け入れて……」

ぐああー締めつけてくるーなんて股関節の筋肉だー!」

「んっーんっー当たり前よー足には自信があるんだから!」

「肉棒をしっかりと膣内でシユキあげて射精を促してくる……さすがだなー!」

「あっーあっーもう観念しなさい!」のデカチンポ!」

あなたは私の中で果てるのよー!」





ドッパッ

ビョリッ

グッ

「フフフ、おんなが、俺はちのびんじりだぞな〜」

「ん……ジメプージメプー……かっはーやめなさいーそんな乱暴にー」

「その言いなながら、ストロークさせる度に……っっかりカリキリをくっくろで咄めしてる……」

「Jのズエムがー」

「ジメプージメプー……ち、ち、ちっわよーたまたま舌が……」

「睨えさせるたびにメス汁が溢れてくるぜー」

「イマムをわてしますます興奮してるんぢやならな〜」





ドビュ

ビュルル

ビュ



「あっ！あっ！あっ！気功拳のポーズのままやりたいうって、あなたも物好きね！」「お前がその技を出すたびに、

その突き出した尻を侵したくてウズウズしてたんだ」

「んっっーヤダ、」の格好…すっっい深いと」ろまで入ってきて、
身体の芯までチンポ響いちやうー！」「

「このデカ尻だ……容赦しないで突きまくるぞー！」

「ああっ！そんな奥まで……やああん！」



ブッ

ドッ

バッ!





トビュ

ビュ

ゴシヤアア



ビュ
ビュ
ビュ

トビュ
ビュ!



















































